シンガポールの華光大帝

二階堂　善　弘

On Huaguang Dadi belief in Singapore

NIKAIDO Yoshihiro

In 2016-2017, I stayed at Singapore, and researched many Chinese temples. Some temples worship Huaguang Dadi as Fujian and Guangdong God. But nowadays very few of temples worship Huaguang Dadi in Mainland China. In Singapore, I researched to fieldwork for Tiong Ghee Temple, Shuang Lin Cheng Huang Miao, Thomson Combined Temple, Sheng Hong Temple, and Leong San See Temple. They all have Huaguang's statues. And there is temple guardian god of Huaguang at Lian Shan Shuang Lin Monastery. It's very rare case.

キーワード：シンガポール、華光大帝、伽藍神、東南アジア、華人信仰

1．華光大帝信仰について

宋代から明代にかけて中国南方において盛んに祭祀された華光大帝の信仰は、清代になると急速に衰えた。

道観において、四大元帥のひとつ馬元帥としての地位は残り、各地道観においてはまだ神像が祀られるものの、かつて信仰が盛んであり、廟が数多く存在した浙江や江蘇においてにおいては、その衰亡が著しい。現在では安徽と福建の一部、それに広東で信仰が残るのみとなっている。かつては関帝と並ぶほどの勢力があったその信仰も、いまではほとんど知る人も少ないほど衰えている。

この神の発展については黄兆漢氏による研究が先駆的であり、さらにリチャード・フォン・グラン氏、賈二強氏によるものがある[1)]。筆者も、これらの業績のあとを受けて、伽藍神としての状況と合わせて、信仰の発展と衰退について調査を行った[2)]。その後、シンガポールにおいて調査を行う機会を得たため、

1）黄兆漢「粤劇戯神華光是何方神聖」（『中国神仙研究』台湾学生書局2001年）49～87頁、リチャード・フォン・グラン Richard von Glahn, "*The Sinister Way — The Divine and the Demonic in Chinese Religious Culture* —", University of California Press, 2004年、及び賈二強『唐宋民間信仰』（福建人民出版社2003年）338～372頁

2）筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部）2012年75～116頁

かの地における信仰について、他のアジア地域も視野に入れつつ報告を行いたい[3)]。

2．東南アジアの華人廟

東南アジア各地においては、移住した華人が様々な信仰を持ち込んだ。タイやベトナム・マレーシアなどにおいても、各地に関帝廟や媽祖廟が存在し、いまでも篤い信仰を受けている。

ただ移民自体、福建・広東地域から来た者が多かったため、これらの地域の信仰がそのまま持ち込まれることが大半であった。そのため、東南アジアの華人信仰は福建・広東の信仰と多くの共通点を持つ。一方で、大伯公のように、かなり東南アジアで独自に発展した信仰もあり、単純ではない。

東南アジア地域では、キリスト教・イスラム教・仏教の信徒も多く、地域によってはヒンドゥー教もまた盛んに行われているために、幾つもの宗教施設が併存するのが一般的である。シンガポールにおいても、チャイナタウンと呼ばれる牛車水地区においては、天福宮（Thian Hock Keng Temple）などの古くからの華人廟が幾つか存在する一方で、シンガポール最古のヒンドゥー寺院であるスリ・マリアマン寺院（Sri Mariamman Temple）、これも古くからのモスクであるジャマエモスク（Masjid Jamae）などが近くに立つ。華人廟の近くに、ヒンドゥー寺院、キリスト教会、ムスリムモスクが併存する状況は、シンガポールやマレーシアでは、ごく当たり前の光景である。

タイではタイ式の仏教寺院が多いが、中華式の仏教寺院も存在する。ベトナムについてはやはり中華系の仏教寺院と華人廟が入り組んだ形で立っているのをよく見る。それぞれの地域では細かい違いがあるものの、華人廟と他の宗教施設が併存するのは、一般的な状況と言える。

シンガポールの廟の場合、他の東南アジア地域とは異なる特色もある。それは複合廟である「聯合廟」が多いことである。この聯合廟については、許源泰氏に詳しい論考がある[4)]。

天福宮や鳳山寺（Hong San See Temple）などの古くからその場に位置する一部の廟を除いて、シンガポールの華人廟は1960年代から80年代かけて場所を移設して再建されたものが大半である。その時に複数の由来の異なる廟を一箇所に集めて建てたため、ひとつの建物に三つ、四つの廟が存在するようになってしまった。また建物は連続していなくても、一箇所に複数の廟が隣接して並ぶこともある。

いずれにせよ、本来の場所から移設されたものであり、もともとの背景を無視して造られるため、廟の系統が曖昧になってしまう場合がある。さらに福建系と広東系の廟が混じることとなり、祭祀される神々も、閩東系なのか、閩南系なのか、潮州系なのかが一見不明確であることも多い。筆者も、調査開始時には大いに当惑した。福建系の神と広東系の神がひとつの廟に混在していたりするためである。

たとえば、トアパヨー地区にある大芭窯伍合廟（United Five Temples of Toa Payoh）などは典型的な聯合廟である。この廟は現在、昭応祠、通興港神廟、聚天宮、福徳祠などから成る。祭祀される神々

3）筆者は2016年10月より2017年９月まで、シンガポール南洋理工大学において研究員として滞在

4）許源泰 HUE Guan Thye, The Evolution of the Singapore United Temple: The Transformation of Chinese Temples in the Chinese Southern Diaspora, *Chinese Southern Diaspora Studies*, Australian National University, Volume 6, 2013, pp157-174.

大芭窯伍合廟

は、観音菩薩、感天大帝、大伯公、土地公など様々で、また虎爺や五方龍神なども祀る。

またビーシャン地区にある湯申廟（Thomson Combined Temple）は、ひとつが華光大帝廟で、もうひとつが金榜山亭天后会、そしてさらに蓮花壇となっており、それぞれ主神は、華光大帝、媽祖、中壇元帥であった。

幾つかの廟では、福建系である清水祖師や法主公とともに、広東系である金花夫人を祀るなど、地域の神々が混在しているものもあった。

むろん、このような併祀については他地域でもあり、台湾などでもある廟に周辺の神が合祀されてしまうことは、よく見られる現象である。台北の龍山寺の後方に水仙が祀られるのは、もともとあった水仙廟がなくなり、そのためにこちらに移設されたものである。ただ、シンガポールのような聯合廟が数多く存在することは、シンガポールの政策と密接に関連しており、他地域では限られた現象と言える。

3．華光大帝の祭祀状況

湯申廟の華光大帝廟は、シンガポールでも数少ない華光大帝を主神とする廟である。筆者調査時（2016年末）にはこの廟は改築中で、新たに建て直される予定である。

ただ、華光大帝はシンガポール・マレーシアの廟には主神でなくとも、別の形で併祀されることが多く、十数箇所の廟でその存在を確認できる。

華光大帝は福州などの閩東地域、また広東で祭祀されているので、シンガポールやマレーシアにおいて信仰が保持されていることは、移民の状況を考慮すればそれほど不思議でもない。ただ、筆者が見た限りでは、ベトナムにおいてはホーチミンの廟で数例、タイのバンコクでもごく一部の廟でしか信仰が確認できなかった。それに比べると、シンガポールでの祭祀の幅広さは異様とも思えるほどである。ただ、現在の憶測では、広東系の住民が多い所で華光の像が見られるのではないかと考えている。

クイーンズタウン地区にある忠義廟（Tiong Ghee Temple）は関帝廟である。ある意味では典型的な

湯申華光大帝廟

関帝廟である。ただ、脇に「代天巡守」とあり王爺も祀る。このほか、註生娘娘と五営も祀るので、恐らくは福建系の廟だと考えられる。この五営のところに、中壇元帥哪吒と並んで華光大帝の像があった。実は、このような形で華光があるのは珍しい。閩東の馬祖諸島では見ることがあったが、台湾本島ではあまり見かけない。

トアパヨー地区にある双林城隍廟（Shuang Lin Cheng Huang Miao）は、二十世紀初めに漳州出身の劉金榜によって建てられた廟である。シンガポール全体でも、かなり古い層に属する廟である。城隍神を中心として、多くの神々を併祀する。媽祖・註生娘娘・文昌帝君・保生大帝・清水祖師などが祀られている。そのなかのひとつとして、華光大帝がある。他の神に比べると小さな立像で、三眼である。

リトルインディア地区の北、ファーラーパーク駅の近くは、インド系住民の多いところであり、ヒンドゥー寺院が数多く存在するが、幾つかの華人廟もある。

なかでも龍山寺（Leong San See Temple）は古い廟として知られる。龍山寺は、台湾の台北や鹿港にも同じ名称の寺院がある。いずれも福建からの移民が建てたもので、観音菩薩を主とする寺である。

媽祖や保生大帝など多くの福建系の神々も祀るなか、華光大帝の像もある。ただ、台北や鹿港で華光像を見ることはないのに対し、こちらでは比較的大きな像が存在した。福州系の信仰が入っているのではないかと推察するが、まだ考慮の余地があると考える。

一方でシンガポールにおける華光の神像には、やや不可解な面もある。双林城隍廟の像もそうであるが、犬を従えている場合が多いのである。一般に華光大帝像には、犬を従えることはほとんどない。

マクファーソン駅に近い韮菜芭城隍廟（Sheng Hong Temple）があり、こちらも普段から多くの参拝客がある廟である。かなりの規模の廟であり、城隍神を中心に数多くの神を祀る。清水祖師・関帝・文昌帝君・中壇元帥・東岳大帝・玄天上帝・斉天大聖・済公・媽祖などの神々である。

華光大帝も祀られるが、一方で外側には別に五顕大帝すなわち華光を置く。その像はまた天狗公と併祀されており、やはり犬を連れている。三眼であるが、手は三叉の矛を持つ。この形象は、どう見ても二郎神のそれである。そもそも犬を連れているという姿は、二郎神特有のものである。

双林城隍廟の華光大帝像

韮菜芭城隍廟では、大殿に華光大帝と二郎神の双方を祀る。そのために、両者を区別しているのは確かである。しかし像を見る限りでは、ともに三眼、甲冑を身につけ、それほどの差異を感じないところもある。

実のところ、二郎神と華光大帝は混同されやすい神格である。もともと二郎神は三眼ではなかったものが、三眼に変じたのはむしろ華光像の影響であると考える[5)]。ただ、華光はその後信仰が衰えたため、多くの神像が二郎神に置き換わっていったものと考えられる。シンガポールにおける華光像は、その経過を時に感じさせるものが多い。

台湾においては、この現象がさらに進んでしまっていることがある。台湾屏東の慈鳳宮は媽祖廟であるが、そこの三階部分の玉皇大帝の前に控える四大護法元帥の像が、非常に不可解なものとなっているのである。

四大元帥、或いは四大護法といえば、温元帥・趙元帥・関元帥・馬元帥というのが古い形である。しかし関元帥については、関帝となり一段地位が高くなったことから、これを外し、代わりに岳天君や康元帥を加えることが多い。

慈鳳宮の場合は、王霊官・趙公明・李靖・楊戩という四大護法となる。これは完全に『封神演義』に依拠したもので、そもそも李靖すなわち李天王がこの位置に入ることは稀である。筆者は、護法神としては哪吒を入れたいところが、別に中壇元帥として独立して他にあるので、代わりに李靖を配したものではないかと考える。そして楊戩は、『封神演義』で三叉の矛を持ち、犬を連れて活躍する武将であり、二郎神と同一視されている。

この楊戩像であるが、三眼であり、三叉の矛を持ち、二郎神としての特色を持っている。むろん、『封

5）筆者「二眼の二郎神」（『東アジア文化交渉研究』関西大学東アジア文化研究科第７号2014年）217-228頁

韮菜芭城隍廟の五顕大帝

台湾屏東慈鳳宮の楊戩像

神演義』の楊戩は二郎神と見なされているので、その点は問題ない。しかし一方で、その手に持つのは三角金磚なのである。その甲冑の姿も、むしろ馬元帥華光の姿に近い。どうも、この像も元来は馬元帥像であったものが、二郎神楊戩との混同により、このような両者の特色を併せ持つ像になってしまったものではないかと考える。これはシンガポールの華光像とも近いものを感じさせる。

4．伽藍神としての華光

萬福寺をはじめとする日本の黄檗宗の各寺院で、華光大帝が伽藍神として祀られることについては、

双林寺伽藍殿の華光大帝

すでに筆者は何度か指摘している[6)]。

華光大帝を伽藍神とすることについては、中国大陸の福州・温州で幾つか確認できたが、その他の地域では、これまでほとんど発見することができなかった。もっとも、そもそも華光の祭祀自体が少ない。

トアパヨー地区にある、シンガポール最古の仏教寺院である蓮山双林寺（Lian Shan Shuang Lin Monastery）は、先にもふれた双林城隍廟に近接するもので、やはり劉金榜の寄進により建てられたものである。ただし現在の伽藍は2001年に改築されたもので、新しい建築物となっている。構造は、山門・天王殿・大雄宝殿・法堂などが直線的に並ぶ、典型的な中華系の寺院構造となっている。

ここには伽藍殿もあり、その主神は関帝である。しかし、関帝の脇には華光大帝の像が配されている。

すなわち、双林寺の伽藍神は関帝と華光である。これは福州と温州で見た例に近いものである。ただ筆者にとっては、東南アジア地域で初めて見る伽藍神としての華光像である。しかもその衣装や金磚を持つ様子などは、宇治萬福寺の像に酷似する。このように数百年の時と数千キロメートルの距離を超えて、類似の像が見られたことについては、個人的に感嘆の念を禁じ得なかった。

双林寺には創建にまつわる伝承がある。この寺院の土地を寄進した劉金榜は夢に西から光り輝く仏が来るのを見て、次の日に船でたどり着いた賢慧禅師を迎えて、この寺院を建てたのだとする[7)]。この賢慧禅師は福州の西禅寺に縁が深かったとされており、恐らくはその影響のもと、華光大帝が伽藍神となっているのだと考える。

6）前掲筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』75～116頁

7）双林寺のサイト http://www.shuanglin.org/ による